

1954年ビキニ環礁でのアメリカ水爆実験

キノコ雲の下で操業し、被爆した船は確認できただけでも延べ992隻にのぼり
多くの若者が被ばくしました。その“X年後”

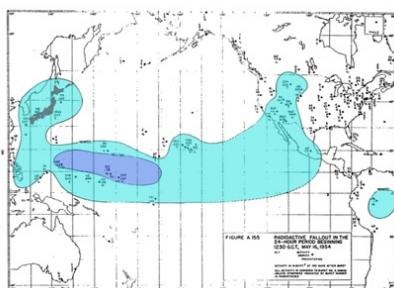


放射線を浴びた
年後

題字
中川順

みんゆう
からく
うとう
ひがい

伊東 英朗 (RNB) メディア情報センター ディレクター



水爆実験で放射能汚染された太平洋エリア図(アメリカ原子力委員会)

一つは、太平洋のマグロ漁場で行われた核兵器実験は、1954年3月だけではなく、1946年、広島・長崎に原爆が投下されたわずか10ヶ月後に始まり、1962年までの17年間に、英米によって100回以上行われているのです。

多くの人がそう記憶しているのではないでしょうか。しかし、この記憶には多くの間違があります。

『第五福竜丸事件』をご存知ですか。『1954年3月、マグロ漁船第五福竜丸が、アメリカが行つた水爆実験によって被ばく、通信長の久保山愛吉さんが、急性放射能症で亡くなった事件』ではないでしょうか。

もう一つは、操業していたマグロ漁船は、第五福竜丸だけではありませんでした。1954年、放射能検査が行われたマグロ漁船は、



1954年 被爆した魚を漁獲した位置図

10ヶ月間だけで延べ2729隻ありました。少なくとも、1年間で延べ3000隻以上の船が、第五福竜丸と同じ海で操業していたことがあります。

さらに、核兵器実験で被ばくした船は、マグロ漁船だけではありませんでした。捕鯨船、貨物船、カツオ船など、太平洋を航行した船も被ばくしたのです。

● 日本にもビキニの灰

しかし政府は：

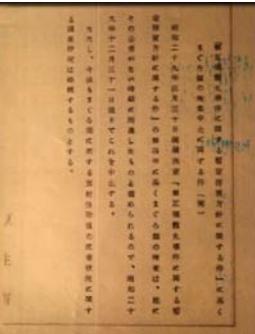
太平洋の中央部で行われた核兵器実験で生み出された強烈な放射性物質は、風に乗り、太平洋を東

へ広がり、およそ1週間でアメリカ大陸に到達。そして、西に広がった放射性物質は、およそ2週間で日本列島に到達したことが、実験を行ったアメリカ原子力委員会の資料で明らかになっています。

もちろん、海水も強く汚染し、様々な魚が汚染しました。

核兵器実験が行われたのは、1946年から1962年の17年間、100回以上に及びます。魚の放射能検査が行われたのは、そのうち、1954年のわずか10ヶ月間のみです。

日本政府は、1954年安全宣言をし、同年12月31日、すべての放射能検査を打ち切つたのです。



放射能検査打ち切りの
公布文書

さらに200万ドルと引き換えに、すべての責任を問わないとする文書をアメリカと交したのです。そのため1955年1月1日からは、全ての魚が水揚げされました。

私が、この事件に出会ったのはさうしたときに、200万ドルと引き換えに、すべての責任を問わないとする文書をアメリカと交したのです。

『雨に濡れると髪の毛が抜ける』という言葉を記憶している人は多いのではないかと思いますが、実は、根拠のある言葉だったのです。しかし、いつの間にか、ことわざ

魚の廃棄基準は毎分100カウント(CPM)と定められています。ところが、日本列島に降り注いだ雨は、その基準をはるかに超えるものでした。京都では86、東京で32、0000CPM、沖縄110、000CPM、鹿児島240、000CPM、福岡350、000CPMととてもない放射能が降り注いだのです。

1954年5月、22人の科学者と新聞記者やカメラマンを乗せた日本政府の調査船俊鶴丸が爆心地付近を目指し出航。海水、大気、魚が激しく放射能汚染していることを観測記録しています。核実験中、日本列島を核実験による放射能が襲いました。当時、

丸以外の被ばく者がいる」と耳にしたのがきっかけでした。その後に驚いたのは事実ですが、それよりもこれだけの大規模な事件がメディアの手でほとんど触れられていないことに驚き、半信半疑な思いだつたことを覚えてています。



日本列島放射能の測定記録(1956-58年)

もともと幼稚園の先生を16年間していましたので、2004年は、まだディレクターとしても駆け出しの頃でした。報道部の経験もなく、調査報道の方法も何も知らないで取材始めたのです。『事実を知りたい』:その一念でした。

しかも露出する枠が決まっているわけでもなく、何もかもが中途半端

などころからのスタートでした。これまで数千時間に及ぶ取材の最初のカットは、高知県宿毛市内に立つ一人の男性の姿から始まっています。神社の周りには満開の桜が揺れていました。

挨拶をすると電話で取材をお願いしていた男性は「自分についてきなさい」と言うと歩き始めました。私とカメラマンの三本は、黙つて男性についていきました。平穏を保っていましたが、初めての取材でもあり、真っ白なキャンバスに何を書き始めればいいのか何も決まっておらず、心の中は不安でいっぱいでした。

男性の名は、元遠洋マグロ漁船新生丸乗組員の山下幸男さん。取材の後、亡くなっています。



山下幸男さん

新生丸は、操業中、マスト横の棒に死の灰が積もつたと言われています。ところが、政府の放射能検査に記録が残っていない謎の船なのです。2004年当時で、19人の乗組員中、生存者はわずか2人。当時、第五福竜丸の乗組員の約半数が生存していたことからも



新生丸

●証言①ガイガーカウンター
魚は捨てさせられた

山下さんは、コタツに入ると、僕の方を見ました。

『質問しなくちゃならない』

そう思った瞬間、僕はこう切り出

『水爆実験のこと覚えていますか?』

今、考えるとそんな唐突な切り出

し方はないだろうと思います。

そんな質問をすれば、相手は警戒

しありやべることもいやべらなくな

つてしまふに違いありません。

ところが、山下さんは、静かにこ

う切り出したのです。

「何年の何月ということは忘れ

たがよ。」これまで取材したほと

んどの乗組員たちは、このエクス

キューズから始まります。(せつか

く来ててくれたけど、たいした話は

できないよ)という優しさから出

る言葉なのだろうと私はそう受け

招き入れてくれました。山下さんは、

取材を始めた数年は、信頼でき

ります。山下さんは、続け

被害の大きさが分かります。

人がやつと通れる路地を過ぎる

と、山下さんは、私たちを自宅に

招き入れてくれました。取材を始めた数年は、信頼できる三本カメラマンと2人で取材を行っていました。三本とは「とにかく語り始めたら顔だからな。余計な映像はいらない」と相談していました。彼の証言がすべてだ

と。

その時分だから船同士の連絡は無線で、陸からも無線の連絡だったからね。

無線でビキニ事件があつたが、福竜丸が被害にあつたということを無線で聞いてね。我々に無線士が報告しただけでしたね。私は甲板員で、詳しいことはぜんぜん分からんけど。操業しよつて、危険区域では無かつた、ちょっと離れたところだ。



水爆実験のキノコ雲

●雪みたいな粉がチラチラ

その実験にも別の船で遭遇して、その時は原爆の光見たんですよ。夜8時やつたと思いますが、きれいな晴天のはずやのに稻光みたいな光がありまして、稻光言うよりか青白い閃光で、目に堪えるよう

な光でしたがね。他の人間が『こりや原爆ぞ!』言うて冗談めかしては来ましたがね。帰つて来たら上陸禁止という事で、『船へ係官が調べに来るまで船に居れ』と言うが調べに来るまで船に居れ』がで、船の一泊した。あくる日、係官がガイガーカウンターですか、機械で各人調べて。被害の原爆にかかるちよるか、かかるちよらん

操作は中止して東京に入航、帰つては来ましたがね。帰つて来た夜8時やつたと思いますが、きれいな晴天のはずやのに稻光みたいな光がありまして、稻光言うよりか青白い閃光で、目に堪えるよう

な光でしたがね。他の人間が『こりや原爆ぞ!』言うて冗談めかしては来ましたがね。帰つて来たら上陸禁止という事で、『船へ係官が調べに来るまで船に居れ』が調べに来るまで船に居れ』がで、船の一泊した。あくる日、係官がガイガーカウンターですか、機械で各人調べて。被害の原爆にかかるちよるか、かかるちよらん

『あー、やっぱり原爆やつたねえ』

言うて騒ぎよつたらそれがどんどん膨れ上がって、その光が2重になつてだる大型みたいになつて、みると見る間にずーっとどんどん広がつて、空一杯とまではいかんけど、かなり広い範囲に広がつてね。広がるにつれて薄うなつてしまつて、で消えたんですがね。

我々もその時分に原爆がそんな命を落とすとか、そんな怖いもんというような認識は薄かつたけれどね。それからもう皆、その話は忘れとつたけれどね。20～30分もしたかせんかぐらいにね、夜やけんライトをあげて操業しよる、そのライトの光に雪みたいな粉がチラチラしだして、『こりや死の灰や』いうて騒いでね。私も怖がつてはおらざつたけど何か気持ちが悪うて、私は船の陰に隠れた記憶があります。それが何ぼも続かんかった、2、3分、5分も続いたか、すぐ晴れましたけど。それが後で思つたら『原爆の灰やつたかな』という風に感じたんですがね。まあ記憶に残つちよるいうたらそれぐらいなことですね。』

山下さんの言葉は、あまりにも衝撃的でした。広島・長崎以外で、キノコ雲を目撃した日本人がいる。自分自身の歴史観が崩れ落ちる瞬間でした。

しかも、山下さんは、数え切れないので数の被害者の一人に過ぎないのです。キノコ雲が目視できる距離、激しい放射線を出す死の灰。彼らは、想像を超えた被ばくをしているはずです。そして、被ばくによつてどのような健康新害が出ているのかについては、まったくわかつていないので。

山下さんは続けます。

「その船に乗つちよつた人間がどんどん50代60代で亡くなつて、『原爆の関係があるんかな』と思つてましたが、その当時荒くれ

無いんです。半信半疑みたいなことでも話も続かんし、最近まで原爆におうたことは忘れておりました。原爆が関係で早死にしたのか、我々乗り込んだ人間がどんどん逝つたということは、元気な人がガンとか何とか死んでしまったということは、やっぱり原爆のせいやろかな、とは思いますけれども」

被ばくをしたことははつきりしていても、そのことによつて何が起こつているのか調査も行われないまま、そして医学的に裏付けることもできず、不安だけを抱え、生存者は生きいくしかないのです。そして、乗組員たちは、自らの死をもつて事実を伝えるしかないので。

もう一人、忘れられない生存者がいました。山下さんの近所に住む伊予田哲夫さんです。伊予田さんも取材の後、亡くなりました。

●証言②船は真昼になつた
みんな若く死んだ
『原爆のやつかい? オヤジも死んだけん、資料ももう無い』
伊予田さんの一言目は、その言葉『原爆の関係があるんかな』といふ



「ドゥオーン、ピカピカピカ…」

伊予田さんの父親は、山下幸男さんが乗つた新生丸の総責任者である漁労長でした。お父さんの話を聞こうと思い訪ねたのです。ところが、伊予田さんは続けてこう語り始めたのです。

伊予田さんの父親は、山下幸男さんが乗つた新生丸の総責任者である漁労長でした。お父さんの話を聞こうと思い訪ねたのです。ところが、伊予田さんは続けてこう語り始めたのです。

